
frozen times ~ 二度と戻らない時間(とき) ~

りす君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

frozen times 二度と戻らない時間^{とき}

【Nコード】

N2086B

【作者名】

りす君

【あらすじ】

頭脳明細、運動神経そこそこ、スタイルはまずまず良いが性格は最悪な大学生、青葉充はクリスマスが近づく12月の中旬に訳もなくただ出掛け、東京・汐留にある巨大なクリスマスツリーの着工現場に来ていた。見物し終え、他へ当てもなく移動する途中、一人の女子大生と出くわす。この彼女の出現こそ、後に起こる奇妙な殺人事件の解決と出会った充に関する過去の忌まわしい事件の真相の手掛りを発見する重要な力ギとなる…

凍話 1 - 出会い - (前書き)

東大生だが周囲から嫌われ者の扱いを受ける主人公とおっとりして
いて一見、馬鹿そうに見えるが神聖な雰囲気をもしだす一人の女
子大生…、二人の出会いはい偶然でもあり、実は必然だったのもし
れない…

凍話1 - 出会い -

日本に寒波が押し寄せ凍てつく12月の中旬、東京・汐留のビル街はクリスマスシーズンに向けての巨大なツリーへの豪華な飾り付けにより、美しいイルミネーションが完成しようとしていた。

クリスマスに近づくに連れて、沢山の恋人達とその完成間近のクリスマスツリーの周辺に溢れていた。

「…クリスマス…か…。」

そう呟く一人の青年…、彼の名は青葉充、^{アオバミツル}東京大学法学部に通う21才である。ある時から頭脳明細、運動神経もそこそこあったがスポーツは特にやってなかった。

181cm、70kgと長身で東大生に一目置かれている存在だった。しかし彼は、彼自身の性格の問題によって周りの人からも嫌悪され、やがて彼から友達などが離れていくのだった…。

彼の性格…、それは人を信用せず、冷たくあしらひ、時には自分の良いように利用する。さらにリアリズム（現実主義）であるので、普通に同じ若者の夢や幻想を潰し、相手の精神を^{ココロ}傷つける。そして自分より下と思う者を嘲笑するなどの冷酷極まりない性格だった。彼は元々、そのような性格では無かった。ある事件によって彼の性格、及び彼の人生観が大きく変わったのだ。

東京の都心部は華やかなイルミネーション達が彩っているが夜は深くなるに連れてまた一段と冷え込む。充は、ツリーを一蔑し、ゆりかもめの駅に向かった。

その途中、不意に誰かとぶつかってしまった。充自身は倒れなかったが、相手方は尻餅をついているようだった。

充は、心底で面倒臭いなと思ったが一応、

「大丈夫ですか。」

と声を掛けた。良く良く見てみると自分と同じ学生だと気付いた。

「大丈夫です、ごめんなさい…私、大学に提出するレポートをじっくり見ていて…そのためよそ見してしまい…。そちらこそ、怪我はありませんでしたか。」

その女子大生が顔を上げた瞬間、充は衝撃を受けてしまった…。

……。嘘だろ？…とても良く似ている。……、あの時の母の顔と…。

「あのー、どうしました、私の顔に何か付いてますか？」
ふと我に返った充は、

「いえ、何でもありません。」

と何事も無かった様に振る舞った。

「そうですかあ。」

と一言言った女子大生は、地面に散らばったレポート用紙を拾い始めたので充も自然に拾うのを手伝っていた。そして拾い集めた用紙を彼女に渡した。

「助かりましたー、ありがとうございます。私、茅場零葉^{カヤバレイハ}って言います。あなたは…。」

「別にここで名乗る必要は無いので…、失礼します。」

と、充はぶっきらぼうに答え、一方的に話を終わらせ、やや駆け足気味でその場を後にした。

茅場零葉…、どこかで聞いた事がある名だな…と思いつつ、充は汐留駅へ向かった。

凍話2・汐留駅殺人事件・（前書き）

充は、大学生の少女と別れて汐留駅に向かった。汐留駅に着くなり、何か異変を感じた充がプラットホームに行くと、そこには一人の老人が地面に蹲^{うずくま}った状態で既に息絶えていた…

凍話2 - 汐留駅殺人事件 -

充は、ゆりかもめ・汐留駅に着くと上のプラットホームに異変を感じた。何かあったのかと思い、改札を抜け、階段を駆け上がるとホームの中心部に群衆が出来ていたので、興味がてらにその群衆に近付いた。

その時充は、反対側のホームに停車中で発車しようとしていた新橋行きの列車の中に、不審な人物を目撃した。が、発車してしまったのでその人物をよく見れなかった。そして群衆の中を掻き分けると、そこには老人と見られる人が大量の血を流しながら、うつ伏せで倒れていた。もう既に息絶えていた…。

数分も経たない内に、近くの警察署から刑事が数人現れ、現場検証が行われた。

充は、刑事に不審な人影を目撃した事を話したが目撃証言が曖昧なので聞き入ってくれなかった。

事情聴取後、駅を出てタクシーを拾おうとした時、後ろから声を掛けられた。

「あのう、これ落ちてましたよ。」

振り向くと、さつき道でぶつかった女子大生、茅場零葉がいた。片手には何か持っていた。充は素早くポケットの中を確認した後、荒々しく彼女の手からそのモノを取った。

「そんなに大切な品だったとは知りませんでした…。それはご家族の写真ですか？」

と、彼女から聞かれたが、

「別に…。あなたには関係ねえだろ。」

と、充は吐き棄てるように言った。

「…そうですね、すみませんでした。」

と、彼女は囁くように言った。

充はそのモノをポケットにしまうと、タクシーを諦め近くのバス停で都営バスの時刻表を見て、バスを待つ事にした。しかし、彼女がついて来るので、

「あの…、まだ何か。」

と、言うとな彼女は

「いえ…、ただ私もこのバスなんです。」

と、答えた。

ちっ、こいつと一緒に方向かよと思い、充は小さく舌打ちをした。やがてバスが到着し、二人は乗り込んだ。

バスの電光掲示板には、先程起こった殺人事件の詳細が流れた…。被害者は、墨田区在住の67才の男性。腹部に数箇所、首に直接刃物で斬り付けられた切傷があり、発見時には、既に死亡していた。警察は現場周辺を一部封鎖し、周囲にいた人間に事情聴取し、早急に犯人を搜索し、発見次第逮捕するという…。

掲示板を見ていた充に零葉が、

「私、家に帰ろうと思って駅へ歩いていたら、駅から出てくる人の様子が変だったので駅に行ったら、さっきの光景でした…。ホント物騒な世の中ですよね…。」

と呟いた。

充は、彼女の話聴き流しながら、窓から見える臨海部の冬景色をぼんやりと眺めていた。

凍話3・カナシミの写真立て・（前書き）

充が、警察からの事情聴取を終えてバスで家に帰ろうとすると、彼の目の前にあの時の大学生、茅場零葉が現れた。零葉は充と一緒にバスだったので、充と零葉はバスの中で先程の駅で起きた事件を振り返る事にした。

凍話3・カナシミの写真立て・

充と零葉はバスに揺られながら、少し話をする事になった。まず、零葉がゆつくりと口を開けた。

「あのう…、そろそろ名前ぐらい教えてくれませんか？」

充はこうなった以上、名前を隠しても無駄の様子だったので、

「…青葉充…。」

と明かした。

「青葉さんって、今社会人ですか？」

妙になれなれしい奴だなと思い、充は一瞬嫌な顔をしたがそれを見てもしまったのか零葉は、

「…すみません…、答えがなくなったら答えなくて良いです…。」
と、今にも泣き出しそうなか弱い声で言った。

充は、少し困り果ててしまった。今、ここでコイツに泣かれたら厄やっ介かいだなと思い、

「いや、大学生…。」

と、言つて置いた。

そうなんですか…私も同じ大学生で2年生ですと、零葉から順に話し掛けてくるので充は面倒臭いと思いつつ、適当に相槌を打つとした。

「ここでお会いしたのも、“初めてでは無い”感じがしますね…。」
と、零葉が静かに呟いた。

“ハジメテデハナイ？”…まさか俺は、前にコイツと会った事があるのか？と、充は少し焦った。

しかし…、会った事があるとすればいつ頃だろうか…全然思い出せないとは俺にしては珍しい…と、充が思っていた時、

「次は、辰巳三番街たつみ」

と、アナウンスが聞こえたので充は降車ボタンを押し、降りる準備をした。その時、零葉は、彼がこちらを見てない隙にこっそりと白

いメモ用紙を一枚とペンを懐ふところから取り出して何かを素早く書き、それを四折りにし、そして充の来ていた上着のポケットの中に気付かれぬよう入れた。

充はバスから降りる際、面倒だったが一応彼女に向かって軽く会釈した。彼女は優しく微笑んでいた…。

充は、バス停から自宅のアパートまでの道のりで先程起きた殺人事件の一部始終を振り返って自分なりに整理してみた…。

「事件を目撃した時間は確か… 22時15分頃だったな。被害者を発見する少し前に、向こう側のホームに到着していた列車の中に確かに不審な人物が乗り込んでいたはずなんだ。この事が、証明出来れば犯人の判明に近付けるのに… クソッ、あの時俺自身がソイツを追いつめれば…」

と、その事について心の中で言いようのない悔しさを噛み締めていた。

その日は夕方から深夜ににかけて、凍てつくような寒さになるので、充は凍えた両手を温めるために上着のポケットの中に両手を入れると、片方のポケットの中に何か入っている事に気付いた。

それを取り出し、街灯の灯りあかを利用して、よく見てみたら四折りにされていたメモ用紙だった…。そのメモには短い文章で、

「もし、お困りであればいつでも電話して下さい。あなたの力になります。茅場零葉」

と、書かれており、更に彼女の携帯番号らしきモノまで載せられていた。

しかし、彼女についての詳しい事は未だに謎いまめいているし、彼女の身中にどれだけ抜群の潜在能力が存在するかは未知数だが、知能の高さと行動力はどうか…あの感じだと、これからホントに役に立つかどうかいまいち信用できず不安だらけだ…と、充はそれらを頭の中で考えながら歩き数分後、彼の自宅であるアパートに到着した。

アパートは二階立てで、見た目はボロいが部屋の内部設備は充実している。充は自分の部屋の鍵を開け、中に入った。充の部屋の中には一般の家電製品やベッド、机などが設置されており、机の上には写真立てがある。充はその写真立てに向かって

「只今。」

と一言言つて、ベッドで横になつて横目で机の上にある写真立てを見つめながら、物思いに耽^{ふけ}つていた…。

その写真立てに飾られている写真は…、充の家族の写真だった。その隣には…既にシケっている線香が…

“ 今でも、こう思う…。あの日、あの事件さえ起こらなければ、俺と俺の家族は今でも、そしてこれからも幸せに暮らしていけたんだ…。なのに、どうして…。どうして俺ん家の家族だけ…。どうしてなんだよお！…！”

充は、行き場の無い怒りをぶつけるように一晩中泣きながら、自らの拳を壁に何度も殴りつけていた…

凍話4 - 謎の刺客到来 - (前書き)

充は、朝起きて直ぐに昨日の殺人事件の手掛りを探しに駅へ行った。
そこで、新たな刺客が現れ、突然襲われる…

凍話4 - 謎の刺客到来 -

…気が付くと、外は朝になっていた。

充は立ち上がって、洗面所で洗顔し、冷蔵庫から牛乳を取り出して飲んだ。

それから、昨日の事件の詳細を調べるために、今日の大学の授業に出席しない代わりに、レポートを大学側にコピーとして提出し、家を出た。

家を出て数分後、充の携帯が鳴った。電話は大学の親友、覆石悠太ふくいしゆうたからだった。充は面倒臭そうに電話に出た。

「もしもし…」

「もしもし、充か。昨日は、大変だったそうじゃないか…殺人事件に巻き込まれて…大丈夫か？」

「どうせ、人事だと思ってんだろ…そう言えよ。」

充はそう思ったが、悠太の話に

「まあ…、あれは偶然だし。」

と流した。

「そうか…まあ、運が悪かったな。あ、そうそう、今日大学内の奴らで合コンすんだけど…お前もどう？」

「お前の存在は当然、合コンの人数併せに過ぎないんだよ。てか今、それどころじゃねえし…」

「あ、ワリい。俺、今日はパスすんわ。それじゃ。」

電話越しの悠太は慌てて、

「お、おい待て、断るなんてひどいなあー。お前の事が好きなら、文学部で美人の野嶋さんまで来るんだぜ、それでも行かねえのか？」

「ああ、文学部の野嶋藍のしまあいか…アイツは別に好みじゃねえし。」

充は、

「それでも、俺は行かねえ。お前が楽しんでこいよ。」

と、一方的に電話を切った。

さて、行くとするかと充は、事件現場の汐留駅に向かった。汐留駅に着いた充は、ホームに向かった。

事件現場は、昨日から（keep out）と書かれているテープが張られていて、入る事ができなかった。

近くに何か手掛りがないか、充が必死に探していた所に後ろから何者かが、襲い掛った。

充は一瞬にして避けた。しかし、突然だったのでよろけてしまい倒れた。

「よく避けましたね、さすが青葉直樹の息子だ。」

この声は…草間慎二…。

草間慎二、56才。空手家で充の父親、直樹の直属の弟子である。直樹は空手家で、全国屈指の兵だった。草間は、充の変わりに直樹の精神を受け継ぎ空手の全国制覇を果たした。しかし、全国制覇を果たした後は性格が急変、大酒呑みで女たらしになってだらしなくなったという事は噂で聞いている…。

「何故、ここにいるんだ…。」

草間は、充に近づき答えた。

「上から直属に言われた事を実行しに来た。充…、今ここでお前を消す。」

…何を言っただ、コイツと充が思った瞬間、草間の右拳が飛んできた。充は受けをし、体勢を整えた。コイツ、ホントに俺を消す気だ…と、充は判断しそこから素早く逃げた。充は駅から出ると零葉と偶然にも出会った。零葉は、汗をかいている充を見て、

「青葉さん、どうかしたんですか？」

と尋ねると、充は息を切らしながら、

「説明は後だ。とにかくここから逃げる。」

と言い、走り出したので零葉は、

「青葉さん、私良い隠れ場所知ってますからそこに行きましよう。」
と言ったので、充は零葉と一緒に彼女の示した場所へ、草間の手か
ら逃れるために急いで逃げだした…

凍話4 - 謎の刺客到来 - (後書き)

この作品をお読みになりました是非、評価の程を宜しくお願い致します。

凍話5・早すぎる別れ…・（前書き）

充は、自分の事を消すと言ってきた草間の手から逃れるために零葉と一緒に、命からがらあるビルの地下に逃げ込んだ。そこで零葉の知り合いの口の悪い青年、森村隼人と出会う。何と零葉は彼と探偵をやっていたのだ…

充達は事件の手がかりを探しに豊洲のドック跡地に行く。

そこで、また哀しい事件が起きてしまう…

凍話5・早すぎる別れ…

充と零葉は追つての草間から命からがら、逃げる事が出来た。

ここは、八幡ビル地下4階の隠し部屋である。

充は零葉に全ての事情を話す事にした。零葉は静かに充の話に、耳を傾け真剣に聞いた。そして、口を開いた。

「…やっかいな敵が現れましたね。草間という男は青葉さんの父親の弟子ですか…。何故、草間は師匠の息子である充さんを消そうと襲ったのでしょうか？」

「解らない…。アイツが全国大会で日本一になった時から人柄が変化したというのは噂で聞いているんだが…。あ、そうだ！アイツ、俺を襲ってきた時に“上からの命令”って言ってたな。もしかして、あの事件の真相を裏で俺を消そうと糸を操っている役者がいるのか？」

「さあ…。今の所、詳細は解りませんが…。あ、それはそうと…。ここは何を隠そう、私“ら”の秘密基地なんです。ジメッてしてますがそれがまた良いんですよ！」

零葉の要らない説明に充はいらついていた。これから、どうすれば良いか…。真剣に考えていたその時、

（バタンっ）

「おい、零葉。汐留で起きた殺人事件現場に行つて来たぜ…。うん？何だこのガキは？」

現れたのは充と同じぐらいの背丈の青年だった。髪はワックスでツンツンしていて光っていて、年は充より若く見える。充の彼への第一印象はチャラチャラした口悪い奴。

「あ、そういえばこの人の事、まだ話してなかったね。こちら汐留

駅で遺体を発見し、犯人を見かけたという青葉充さん。」

「ふーん…、コイツがね…。俺の名前は森村隼人^{もりむらはやと}…一応名前だけ言っておく。お前さんは幾つだよ？」

もう少し、まともな口の聞方があるだろ…勉強しろよ…充は思った。

「21。」

すると隼人が

「ほえー、あんた俺と同じ年じゃん！それにしても…幸薄そうな顔をしてんなあ。」

ほつとけよ…ここにはマシな奴は居ねえのかと充は感じた。零葉は言った。

「私と彼はここで探偵をしてるんです。今までいろいろな仕事を大と両立しながらやってきました。今回の費用は一切要りませんから、充さんの御手伝いをさせて下さい、お願いします！」

充は、別に構わないと承諾した。

「おい、本来ならコイツからお願いしますと言うべきだべ？何で、零葉が謝んだよお！」

と、隼人。零葉は制して、

「隼人は黙ってて。これは私たちにとって仕事のプライドを掛けた犯人捜しだから、こつちからお願いしてるの、解った？」

「ちっ！！」

と、隼人はそっぽを向いてしまった。充はそれに構わず、零葉に事件が起こった時の詳細説明をした。

零葉は、少し考えた後、思い出したという動作をして口を開いた。

「そついえば、前の事件で豊洲に行ったときに船のドック跡地に倉庫が何棟か出来ていたんです。噂ではその倉庫は裏のマフィア達が隠れ家として利用しているって話を聞きました。怪しいので、今からその倉庫地に行ってみましょう。」

と言ってハンガーに掛けてあったコートを着用した零葉は出ていった。

「ちっ！…しゃあねえ、俺もいつか。」

と、隼人は言つて外に出た。

充は、呆然と見ていたがやっと気づき、外に出た。

3人はビルから近くでタクシーを拾い、豊洲のドック跡地に行った。

ドック跡地は閑静に包まれていた。時々、船の汽笛音が聞こえる程度。

倉庫を見て行動派なのか隼人は、

「俺から中を確認して来る。零葉と坊っちゃん俺が良いというま
で動くんじゃねえぜ。」と、言い残して倉庫に単独で入っていった…。

隼人が倉庫侵入をして数分後、事件はまた起きてしまった…

(チュドーン！！)

何と、隼人の入って行った倉庫が突然爆発したのだ…。充と零葉は
爆発時の爆風により吹っ飛ばされてしまった…

身体を強く打ち零葉は気絶し、充も意識を失う前に向こう側につっ
すらと人影が走っていくのを見たが、力尽きた…

凍話6・裏社会の情報入手…そして刺客再来・（前書き）

充は、亡くなった森村の葬儀の帰りに非通知の着信に出た。その相手は…、闇の“裏社会”で権力を奮っている謎の男からだった。男は充達にこの事件から手をひけと言われるがそれを無視する。

充は事件の情報を得るためにある街の情報屋に入った。そこには、とても信憑性のない胡散臭そうな青年がいた…

凍話6・裏社会の情報入手…そして刺客再来・

充は、意識が戻り目を開けるとそこは病院のベッドの上だと解った。隣のベッドにはまだ意識が戻らない零葉が眠っている…。

充は起き上がろうとするが、激しい痛みが全身に伝わり出来なかった。

「青葉さん…。」

零葉は意識を取り戻した。次の瞬間、ワツと大泣きしていた…。

充は、さっきの爆発事件の詳細を知るために看護師を呼び、ラジオをつけてもらった。

「キュイ…キュイ…：今日、午前11時47分頃に東京・豊洲のドック跡地の倉庫で爆発が起こり、倉庫は炎上。焼け跡から男性の遺体が発見されました。被害者は森村隼人さん21才と判明。警察は事故と事件の両方で捜査を進めています…」

充は、静かにラジオを切った。

「森村：ホントに死んじまったのかよ…」

充は、何も出来なかった自分に不甲斐なさを感じた。隣の零葉を見ると、布団にくるまってさめざめと泣いていた…

森村隼人の葬儀に、二人は何とか出席出来た。二人は彼の最後の雄志を見て、斎場を後にした。

斎場から出てからすぐ、充の携帯に非通知の着信が掛つてきた。充は、恐る恐る電話に出た…

「もしもし…、青葉充だな。」

声から人物を判断するのは難しいが、年齢は4〜50代ぐらいの渋みが掛った声だ。しかし、充は瞬時に思った。何故、自分のフルネームを知っているのかと。

「誰だ…アンタ。」

「ふっ、まあ…あの豊洲の倉庫爆発を命令した裏社会の者と言えば良いか。あのガキは私らの周りでチヨロチヨロして目障りだったかな、ちよっくら消したまでさ。まあ、重要な“モノ”を失いたく無かったんでね…。さて、君らもこの事で良く解つたる？この事から早く手をひきなさい、そうしないとどういう事になるか…解るよね？」

それぐらい充は承知だった。裏社会で権力を奮う人間は、何をしかしたとしても力で揉み消せる…例えそれが犯罪だったとしても。しかし、充は言い放った。

「嫌だね、これでも漢おとこだから諦めが悪いのさ。真実を明かし、お前らの正体を暴いて警察のブタ箱（監獄）の中にぶち込ませてやるよ。」

中年男は鼻で笑いながら言った。

「ふっ…君なら解つてくれると思っていたが…。知らないぞ、どうなったって。後が無いのは君達の方だからね。それじゃ、少しでも生き延びられる事を神にでも祈っておきな。」

そこで、電話は切られてしまった。とりあえず、充は解つた事を挙げてみる。犯人は裏社会の人間で巨大な権力を持っている。そして重要な“モノ”がバレないように死守している事…

充は事件の情報を手に入れる事にした。まず、隼人の件で衰弱しきっていた零葉を一旦彼女の実家に帰し、埼玉のある街の噂で流れていた情報の確実な情報屋を捜すため、現地の路地裏を果てしなく歩き回りようやく見つけた。

外観は情報屋だとは解りにくくなっている。情報屋ならそりやそうだなと充は思った。とりあえず充は中に入ってみた…。

中はあまり片付けられておらず、大量の書類などが棚やテーブルなどが覆われていた。充は人が居ないのを気付き、呼んだ。

「あのー、誰かいませんかー！」

充は声が良く響いた、防音ガラスだから外に聞こえない分、通るんだなと思った。すると突然奥から、

「うおおおおおー!!!」

と雄叫び声的な声を上げながら、一人の青年が現れた。充は咄然とした。彼の風貌は一般人から考えて有り得ないほどダサいのだ。しかも、今起きたのか髪をボリボリと掻いて面倒臭そうに立っているのだ。とてもじゃないけど信用性ゼロに見える。ホントに大丈夫だろうか。充は段々と不安になってきた。青年は口を開いた。

「お客さん、困り事ですな。しかも事件系の事で…」

「えっ?!」

充はひどく驚いた。何故、一言も事件と言っていないのに俺が事件の情報欲しがつてると解るんだ、と。

「お客さん、ありますよありますよ! 汐留の事件と豊洲の事件の情報をぎっしりと! いやあ、情報を手に入れるまで時間が掛りましたよー。」

何者だよ、アンタ? エスパーク? ヒトの心を読み取れるのか? それともストーリーカー? 充はこれ以上考えるのを止め、青年に言った。

「そうです、俺が欲しいのはその二つの事件の情報なんです。」

すると、青年はニヤリと笑い、

「やはり。やっぱりそう思いましたよお。情報料は少々値が張りますよお。」

ゴクリ。一体幾らなんだ、うん百万単位か。いや、裏社会が関係してるからざっとうん千万を越えるか。それだと一生掛けても払えない額だなと充は思った。すると、青年は言った。

「今回は50万で手を打ちましょう。」

安っ。充は拍子抜けしてしまった。こんな危ない事件なのに情報料が安いんだ、と疑問に思った。

「えっ…そんなに安くて良いんですか？」

と、充は問い掛けた。青年は、

「見たところ…あなた学生だし、そんな法外な料金なんて採れませんよ。」

と、ヘラヘラと笑いながら言う。

ここはホントに情報が正しいのかと充は信憑性を疑ったが、この後彼から聞いた情報に充は信憑性があると判断出来た。充は、情報屋に感謝し、

「金は八幡ビルに請求しといて下さい。」

「あいよ。」

最後まで面倒臭そうに見えた青年に別れを告げ、外に出た。

充は情報屋から情報をたんまりと貰い、アイツらに勝てる確証を導き出していた。充は、急いでその情報を零葉に伝えようと駅に向かうとした瞬間…

「おい、やっと見つけたぜ…充！」

後ろを振り返ると、そこにはあの草間がバタフライナイフを持ち、ガムをクチャクチャと噛みながらつつ立っていた…

凍話 6 - 裏社会の情報入手…そして刺客再来 - (後書き)

次回、充は草間と遂に勝負をし、そして裏社会のボスに直接対決しに行く…。果たして事件の黒幕とは誰か？

凍話 7 - 最終対決…その先にあつた真実 - (前書き)

充は到頭、ボスとの決着をつけにきた。そのボスの正体は意外な人物だった…

果たして、充はボスに勝てるのか？そして充を苦しめていた過去の残酷な事件とは？

凍話7・最終対決…その先にあつた真実・

「ようやく見つけたぜ…これで終りだ!」

充が身構える前に、草間は迫ってきた。充は、何とか避けて草間の様子を観察していた。

「この仕事が成功すれば、俺は大金を貰って後世は裕福に生活できるのだ。そのためにも、お前をここでぶっ殺す!」

ダメだ…完璧に金で頭がイっちゃってる。話をつけられないと思った充は即座に考えた。そして草間に近付いた。

「おつ、自分から死ぬ気になったか…。死ねえ!」

草間が襲いかかる、しかし充は簡単に避けて草間の右腕を素早く捻^{ひね}り上げバタフライナイフを落とさせた。そして草間の腹に、拳の一撃を喰らわせ、気絶させた。それは、一瞬の出来事だった。

「ふう…」

充は溜め息をつき、急いでその場から去った。

多分、情報を手に入れた事は零葉に伝えられないかもしれないと思つた充は、そのまま家に帰り、ボスと闘うための万全の態勢を整えた。

そして、実行当日。充は確かな情報を頼りに敵のアジトと思われる建物の前に立っていた。

「確かにここだな…異様な雰囲気がある…。」

充が意を決して、入ろうとした瞬間、

「青葉さん!」

振り向くと、何と零葉がいた。

「どうして…ここに?」

「私もただ休んでいた訳じゃない、ちゃんと情報収集してここに来たんですから。」

チツ…しょうがねえな…充は小さく笑い、そして前を見据えながら建物内へ零葉と一緒に入って行った…

建物内は暗く寒い。まさに、刑務所のような雰囲気だった。

充はゆつくり奥へ奥へと歩いていくと、いつの間にか一つのドアが目の前にあった。

「このドアにボスがいる…行くぞ、茅場！…あれ…茅場？お前、何処にいるんだ？」

後ろにいるはずの零葉が突然と姿をくらました。充は捜したが、見つからなかった。その後で捜すことにしてドアへ向かった…。

重いドアをこじ開ける。そこには煙のような白い空気に覆われていた、そして…

「よく来たな、青葉充！」

そのドスの掛った声と共に部屋全体が明るくなった。そして充とボスに、スポットライトの光が浴びせられた。

「ボスってお前だったんだな…覆石悠太！」

…ボスの正体が解った時には、充は困惑した。まさかアイツが…何故…？…しかし、背に腹はかえられない…俺が暴く！充は、こうして意を決して真っ向対決に来たのだ。

「何故…、お前は老人と若者を殺したんだ…？」

覆石はケラケラと笑い、そしていきなり怒りを露にした。

「アイツ（老人）は、ただの人じゃねえよ！アイツは…アイツは昔某テレビ局のアナウンサーだったんだよ！」

…アナウンサー？何故、元アナウンサーを惨殺しなければならなかったのか？

「何故、因果関係の無い元アナウンサーを殺した？」

「ふっ…憶えているか…あの十年前の米航空機襲撃墜落事件を！」

「……………?!」

充は頭の中が混乱した…

- あの事件が無ければ… -

充11才の冬、両親と弟は風邪をひいていた充を日本の祖母の家に置いて、オーロラを見るためにアメリカ・アラスカ旅行をしに行った。

当時、アメリカとロシアとの国交関係は悪化の路線を辿っていた。一歩間違えたら両国で戦争が起きてしまうかもしれない状態に陥っていた。

そして遂に事件は起きてしまった…

米航空機203便・アンカレッジ行きはオホーツク海を北上し、ベーリング海に差し掛かるうとしていた。その時、スクランブルでロシアの戦闘機が旅客機に威嚇射撃をし、それにより旅客機は撃墜されて炎の塊となり、冬のベーリング海へ沈んでいった…

この事件が発覚し、両国で戦争が始まった…。そして戦争は2年前に終了した。

「あの事件で俺は大切な人を失った…なのに、アイツはその事件を1日しか取り上げ無かった。俺はテレビ局に問い合わせ、抗議したが全くの無駄だった…。クソッ…」

あの事件で乗っていた乗客は全て死亡し、中には死体が海中に沈まず、海面にうつ伏せの状態で浮き上がっていた光景は事件の無惨さを醸し出していた。^{かも}

「じゃあ…何故若者も殺した？」

「ああ…アイツはただの事件の邪魔者だったから失せて貰ったよ。」
ケラケラと笑っている覆石に充は怒りを感じた。森村が救われない…
「デメエ…人の命を何だと思ってるんだ！」

充は、到頭我慢の限界に達し、覆石に殴り掛った。しかし…、
「おっと、それ以上動くなよ。この女がどうなっても良いのかい？」
そこには、気絶して縄で吊されている零葉の姿があった…

クソッ…さっきの時点で拐^{さら}われていたんだ。もっと早く気付けば…。

充はたじろいだ。覆石が嘲笑した。

「ふっ…コイツはお前の仲間だったよなあ？さすがに、傷つけられないよなあ？み・つ・る・君。ヒヤアハッハッハ！」

チッ、腹が立つ…何か手は無いかと充は周りを見た。するとガラクタの山の中に、鉄パイプが数本あった。素早くそれを取り、覆石の様子を窺^{うかが}った。

「お、それで闘うのかい？馬鹿だね、こっちにはチャカが沢山あるんでね。死ね！」

（ズガン、ズガン！）

充は瞬発力を最大限に活かしながら避け、覆石に近付いた。

「ちょこまか動くなよ、隙あり！」

（ズガン！）

グッ！足を片方やられた…充は苦痛を必死に抑えながら、近付き、

「うおおおおお！」

と、思いっきり鉄パイプを覆石の頭上に振り上げた瞬間、鉄パイプを手から放して怯^{ひる}んで隙だらけだった覆石の顔面に拳から最大力の一撃を喰らわした。覆石は吹っ飛び、気絶した…

充は血が流れ出てくる足を抑えて蹲^{すquat}った。その時、パトカーのサイレンが聴こえたような気がした…

事件から数週間後、充は休養のため家で零葉からの手紙を読んでいた。

（前略：

お元気ですか？私は平気です。あれから、数週間が経過しました。あの時、絶体絶命だったと思いました。青葉さんが黒幕を倒した時、私は話の途中で目が覚めて、何とか自力で縄をほどいた時に、蹲ったあなたを見て、直ぐ様に警察と救急車を呼びました。

実はその話で伝えたい事があります。その撃墜された旅客機の機長は、私の父でした。さらに乗客には私の母・兄・姉が乗っていました。

私の父は自慢ではないですが、機長の中では最高クラスだったんです。それが悪かったんです…

あの時、アメリカやロシアへの運航は治安の関係上、危険であまり飛ばさない方が良くと世間では言われていました。しかし、父の上司はそれを聞き入れずに経営難を乗り越える為、半ば強制的に部下をアメリカやロシアに飛ばしていました。

そんな時、私の父がアラスカ行きの運航に選ばれたのです。父は危険だと上司に抗議しましたが、しかし経営の理由で取り合って貰えず、到頭父はアラスカへの旅客機の機長を任されてしまったのです。

父の安否が心配だった母と兄と姉は一緒に飛行機でアラスカに旅行に行こうと決めました。しかし、あの事件が起きてしまったのです…。

父は本当に天国で後悔していると思います。そんな父を許してあげて下さい、御願います…。

P・S・今年の命日の日にもしよかったら…、一緒にアラスカへ行きませんか…？返事待ってます。

茅場 零葉)

充は読み終わると静かにそれを机の引き出しにしまい込み、窓の外
の景色を眺めた。

白く淡い氷の結晶が寒空から地上にゆっくりと舞い降りていた…

凍話 7 - 最終対決…その先にあつた真実 - (後書き)

この連載小説をお読み下さり誠にありがとうございました。これからも、読者の皆さんにまた読まれる事を願いつつ、随時書いていきますので宜しく御願い致します…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2086b/>

frozen times ~ 二度と戻らない時間(とき) ~

2010年10月14日13時08分発行